

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳とは

山岡洋一

- 翻訳者の責任

翻訳者はそもそも翻訳によって作られる文書に対して全責任を負う立場にある。そして、全責任を負うからこそ、翻訳は面白いし、意味のある仕事になる。

名訳

須藤朱美

- 小川高義訳『さゆり』

美しい日本語で訳され、原書ではなく訳書で読む価値のある本がここにある。

誰も教えてくれなかった英語（第8回）

柴田耕太郎

- 翻訳者はえらい！

戦後を代表する英文学者の解説書をも、総じて訳文は悪く、文法的解説に瑕疵散見。それに対して翻訳家は、劣悪な条件にめげず、じつにえらい。

翻訳の道具

山岡洋一

- パソコンの世界の常識は世間の非常識

世間の常識で考えてパソコンに頼っていると、とんでもない被害を受けることが少なくない。複合機とOSの具体例をあげる。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳者の責任

最近、翻訳者の集まりに出席する機会があった。翻訳者の地位向上がテーマだということで、どのような話になるか、興味津々だった。だが、正直に言って失望した。こんな話をしているようでは、翻訳者の地位が高まるはずがないとすら思えたほどだ。

例をあげよう。社内翻訳者の苦勞が話題になった。社内体制が整っていないので苦勞ばかりだという意見が強かった。たとえばある男性は、外資系企業に勤めていて、本社で書かれる顧客向けの文書を訳しているが、社内の専門家によるチェックもなく、そのまま顧客に配付していると憤慨していた。別の翻訳者が、自分の会社では翻訳者が英訳したものにネイティブ・チェックをかけてくれないと嘆いていた。話のタネはつきず、同様の問題や苦勞が何人もの出席者から指摘されていった。翻訳に理解のある上司がいらないから苦勞をするのだということのようだった。

その集まりに出席したのははじめてだったので黙って聞き役にまわっていたが、正直に言って信じられない思いだった。みな、かなりのベテランのようだし、社会人としての経歴が長い人ばかりのようだった。それなのに、失礼ながら、社会人としての基本が分かっていないのではないかと思えたのだ。翻訳者として雇われるか、翻訳を担当するポストを任された以上、翻訳して作成する文書について最終責任を負うのが当然ではないのか。たとえば社内の専門家に聞く必要があれば、質問して問題を解消する責任を負うのは自分であって上司ではない。そんなことは社内のどの部署にいても常識だ。翻訳担当の部門だけが例外だとする理由はあるはずもない。

だが、この日に集まった人たちは、少なくとも社内体制の不備について憤慨していた人たちは、そうは考えていないようだった。自分たちの責任は訳すことだけであり、それをちゃんとした文書に仕上げるのは誰か他人の責任だと考えているようであった。訳しているのはかなり専門的な文書なので、翻訳者である自分たちに理解できるはずがない。自分たちの役割は外国語の文書を日本語にし、日本語の文書を外国語にするところまでであって、それ以上の責任はとりようがないと考えているようであった。

このような考え方は翻訳者の間にきわめて根強い。その証拠はあちこちに転がっている。いくつか例をあげてみよう。

ある出版社でこういう話を聞いた。ベテランの翻訳者からの持ち込み企画で、きわめて分厚い本を訳すことになった。量が量なので、とても印税ではできない。翻訳期間中の生活を保証してほしい。何人もの下訳者を使うので、その支払いもお願いしたい。そういう条件だったが、きわめて魅力的な企画だったので要求をのむことにした。2年か3年して原稿が完成したが、翻訳の質があまりに低いので仰天した。翻訳者に修正を要求したところ、翻訳は終わっており、あとは編集者の役割だと突っぱねられたという。編集者が泣く泣く修正しているころ、翻訳者は翻訳の蘊蓄を傾ける本を執筆していたのだそうだ。

別の出版社から、翻訳チェックを依頼されたことがある。アメリカの著名人が書いた軽いエッセーなのだが、半分ほどが政治と経済をテーマにしていて、翻訳者の不得意な分野なので、チェックしてほしいという。著者に魅力があったので引き受けるつもりだったが、届いた翻訳原稿をみて仰天した。あちこちに英文のままのところがあって、「意味不明」などと書かれている。それも少し調べれば分からないはずがない表現が「意味不明」とされていたのだ。冗談ではない、こんな原稿は突き返すべきだと担当編集者に言い、チェックはお断りすることにした。後で聞いた話では、偉い先生なので突き返すわけにもいかず、出版時期が迫っていたので、編集者が手を入れて、何とか形にして出版したのだという。

この手の話は山ほどある。こういう問題にぶつかるたびに、翻訳された文書を読まされる読者は気の毒だと感じる。翻訳者の地位向上は容易ではないとも感じる。翻訳とは完成された文書を作るのではなく、編集者なり専門家なり、だれかが手を入れてはじめて製品になる半製品を作ることだと考えている翻訳者が多いのだ。もちろん、そうとしか考えられない翻訳者の限界をよく知っていて、半製品を仕上げて製品にする責任を負ってくれる人がいる場合もある。だが、たいしては半製品でしかないものが、世の中にていく結果になる。それを読み解くのは読者の責任ですといわ

んばかりに。

翻訳者の一部（といってもかなり大きな部分）のこうした考え方について、2つの点を指摘しておきたい。第1に、翻訳者はそもそも翻訳によって作られる文書に対して全責任を負う立場にある。翻訳の歴史をみていけば、これが当然だということがわかる。訳文に対して全責任を負わないのは、いわば墮落した考え方であり、歪んだ考え方である。第2に、全責任を負うからこそ、翻訳は面白いし、意味のある仕事になる。全責任を負わないのでは、翻訳は機械的な作業になり、社会的な意味があまりない仕事になる。

翻訳者の責任

世間で翻訳が話題になるとき、たいていは悪口であり嘆きである。誤訳の指摘や、不適切な翻訳の指摘が大部分なのではないだろうか。これほど悪口や嘆きが多いのは、翻訳者が責任を果たしてこなかったからなのだろうか。そうではないと思う。翻訳者は日本の長い歴史のなかで、基本的にはその責任を果たしてきたと考える。翻訳の歴史を考えれば、それ以外の結論になるはずがない。

なぜそう考えるのか。過去 2000 年近く、当初は主に中国語から、最近では主に欧米語から、日本の翻訳者は大量の文書を翻訳してきた。大量の業績を細かく検討した結果なのか。そうではない。世界の翻訳者はともかく、日本の翻訳者が基本的に責任を果たしてきたことは、目の前にある現実からすぐに読み取れる。

そもそも翻訳とは、外国の進んだ考え方や技術などを母語で取り入れるために行われるものだ。だから、外国の進んだ考え方や技術などが母語で取り入れられてきたかどうかをみれば、翻訳者が基本的に責任を果たしてきたかどうかを判断できる。いまの日本で、これはすべて日本で作られたものだといえる考え方や技術などがどれだけあるかを考えてみればいい。たぶん、ほとんどないというのが正解はずだ。いまの考え方や技術などはほぼすべて、何らかの形で外国の優れた考え方や技術などを取り入れた結果なのだ。そして、取り入れる際には、文字通りか事実上かは別にして、ほぼかならず翻訳者が介在している。外国の進んだ考え方や技術などを学んで、学んだ結果を母語で伝えた人が事実上の翻訳者、外国の進んだ考え方や技術などが書かれた本や文書を訳した人が文字通りの翻訳者だ。この2種類の翻訳者の活躍があったから、いまの日本があるといっても過言ではないはずだ。

たとえば、翻訳者が基本的に責任を果たしていなければ、電気はつかないし、電車や自動車は動かないし、建物は崩れ落ちるし、溶鉱炉や石油化学プラントは爆発するし、芸術も芸能も育たないし、法律は機能しないし、政治や経済、社会の組織は動かないはずだ。もちろん細かくみていけば、技術にも産業にも芸術や芸能にも政治にも経済にもさまざまな問題がある。だが基本的には、外国の進んだ考え方や技術などをうまく取り入れてきたといえるはずだ。目の前にある現実をみれば、そう結論づけることができるはずである。

そして過去の事実をみていけば、外国の進んだ考え方や技術を取り入れる仕事や、ときには文字通り命をかけた仕事や、少なくとも一生をかけて悔いのない仕事であることがわかる。たとえば翻訳に頼って近代的な軍隊を作り上げた人たちは、文字通り命をかけていた。翻訳が間違っていれば、戦いに負け、自分が命を落とすのはもちろん、日本という国が滅び、日本民族すら滅びることになりかねなかった。また、日本に石油精製、石油化学などの技術を導入した人たちは、日本人が（つまり欧米人でない人間が）プラントなんぞを作り操業すれば、爆発して命はないと脅されながら、必死になって技術を学んだ。数学や哲学、法律や経済・経営、建築や土木など、どの分野でも、文字通りか事実上の翻訳者が外国の進んだ考え方や技術を取り入れることに命をかけ、一生をかけてきた。そして命をかけ、一生をかけるとき、翻訳について全責任を負うのは考えるまでもないほど当たり前のことであり、自分たちの責任は訳すことだけだなどとは誰も考えなかった。

外国の進んだ考え方や技術などを母語で取り入れるという本来の目的で翻訳が行われているかぎり、翻訳者が全責任を負うのは当然である。翻訳者の役割は外国語の文章を母語に訳すことだけだなどとは誰も考えない。翻訳者は語学だけの専門家だなどとは誰も考えない。どんな分野の文章を訳すにしても、自分にとってはまったく専門外の分野の文章を訳すにしても、翻訳を引き受けたからには、その分野の専門家並みに、いや専門家以上に内容を理解し、理解した内容を母語で伝えることに全責任を負う。これが当然である。これが翻訳の本来の姿である。

だが、翻訳の成果が積み重なってくると、外国の進んだ考え方や技術などを十分に吸収できているという安心感が生まれる。そうなると、外国の進んだ考え方や技術などを取り入れることに、それほど切迫感や使命感が感じられなくなる。そうなったときに生まれて

きたのが、翻訳は語学の仕事だという考え方だ。翻訳者は外国語で書かれたものを母語にするか、母語で書かれたものを外国語にするだけであって、内容には責任を負わず、文章にも責任を負わないという腑抜けな考え方だ。内容を伝えるという肝心要の役割を忘れた考え方だ。

専門化が進んでいくのが世の中のつねだから、外国の進んだ考え方や技術などを取り入れる際にも、語学の部分と内容の理解の部分とに専門が分化していくのは当然だという見方もあるだろう。だが、こう考えているのは、語学の部分すら満足な力をもてなくなる。

先人は外国の進んだ考え方や技術などを取り入れるために、命をかけて、あるいは一生をかけて学んだ。学ぶ手段のひとつが外国語だった。外国語で学び、その内容を母語で伝えるにはどうすべきかを考えた。その過程で、外国語についても、その背景にある物の見方や考え方についても、さらには学んだ内容を日本語で表現する方法についても、徹底して考えた。訳語を考え、何万、何十万もの訳語を作ってきた。

いまでは、誰でも先人が考えた結果を、結果だけを気軽に使えるようになってきている。外国語の文法に関する研究が進んでいるし、たいていの語に訳語がつけられているので、外国語で書かれた文章の意味を徹底して考えなくても、訳文らしきものを作ることはできる。意味が理解できていなくても、訳文なら作れる。たいていの人々が「翻訳」という言葉で考えているのは、そのようにして作られた訳文のことなのだ。

翻訳者が訳した文章を専門家のチェックも経ないでそのままさらされてはかなわないと悲鳴をあげ、上司の無理解を嘆くのは、翻訳をそのようなものだと考えているからだ。意味は分かりません、外国語を母語に直しただけですという。意味が伝わるようにするのは、翻訳者の役割ではありませんという。翻訳者は語学だけを専門にしているからという。

冗談はやめてほしい。そのように主張する人たちはまず間違いなく、外国語の文章が読めていないのだ。読めていれば内容が理解できているはず。内容が理解できていないのなら、読めているとはいわない。そして、外国語の文章が読めていて、内容が理解できていれば、専門家によるチェックなどなくても、読者に意味が伝わる訳文が書けるはずだ。書けないというのなら、意味が分かっておらず、外国語が読めていない。専門のはずの外国語の力が弱いのだ。それ以外の答え

はあろうはずがない。

翻訳の醍醐味

翻訳は面白い。翻訳の過程でそれまで知らなかった知識や情報、考え方や物の見方を知ることができる。外国語と母語の違いを深く考えるようになり、言葉というものの面白さに気づかされる。翻訳とは基本的には母語で文章を書く仕事だから、訳語をあれやこれや考えていく過程で、日本語の豊かさ、面白さ、美しさにも気づかされる。そしてもちろん、外国の進んだ考え方や技術を日本の読者に紹介する一助になれる。だから翻訳は面白い。これほど面白く、これほど社会的意義のある仕事はそうそうあるものではない。

だが、翻訳の醍醐味を味わえるのは、内容を理解し、それを母語で伝えることに全責任を負うときだけである。全責任を負わないのであれば、負えないのであれば、翻訳ほどつまらない仕事はないといえるかもしれない。何も作らない。何も達成できない。完成品は作れない。中途半端な半製品を作って、肝心な点は他人にお任せであれば、何の面白みもない。達成感もない。それでも収入が抜群に良ければ我慢するが、翻訳者の収入は嘆きの対象になっても、自慢の対象にはなるはずがない。

どうも、このあたりの事情が分からない人が多いようで、いつも不思議に思っている。たとえば、自分でものを書くなるとんでもないことだが、翻訳なら何とかできそうだという。そう考える理由は多種多様なので、なかにはそう考えるからこそ、翻訳に適していると思える人もいる。だがたいていは違う。翻訳という仕事について勘違いしているのだ。自分でものを書いた場合、質が低くても自分ひとりが恥をかかなくていい。他人にはそれほど迷惑をかけない。だが、翻訳の質が低ければ、自分が恥をかかなくていい。原著者に迷惑をかけるし、原著者に熱心な読者がいれば、その人たちも失望する。だから、翻訳は自分でものを書くより責任が重い。だから翻訳は面白い。だから、翻訳はやり甲斐があるのだ。

小川高義訳『さゆり』

「へえ、おかあさん、これから気張らせてもらいます」

「もう初桃さんを怒らせんといてや。ほかの子おかて、あんじょうやってますのや。あんたにできひんことあらへんえ」

「へえ、おかあさん……ええと、一つだけ聞いてもよろしおすやろか。うちの姉の行き先を知ってはる人おへんのか、ずっと気になって、あの、手紙でも出したい思うてまして」

(アーサー・ゴールデン著小川高義訳『さゆり』文藝春秋社 p71~72)

いっさいの前情報なしに上のセリフを読んで、はたしてこの文章に英語の原著があり、それを日本語に翻したものとピンとくる方がおられるでしょうか。もしいらっしゃるとしたら、おそらくその方は卓抜なる日本語力をお持ちであり、わたくしのごとき若造にはとうてい到達しえない境地にふみこまれている方が、でなければ、翻訳というものは英語ができればおのずとなしえる生業だと、いささか勘違いされている方だとしか言いようがありません。それほどまでに小川氏の訳は美しい日本語で訳されています。さっそく例を挙げて検証したいとおもいます。

ほかの科目では、おカボも三味線ほどの体たらくではありませんでしたので、見ているほうも救われました。たとえば舞のお稽古ですと、全員そろって動きますので、一人だけ目立つということがありません。それにおカボも下の下というわけではなく、ぎこちないながらに、どこことなく味のある動きをしていたように思います。

(上巻 p82)

It was a relief to me that Pumpkin's other classes weren't as painful to watch as the first one had been. In the dance class, for example, the students practiced the moves in unison, with the result that no one stood out. Pumpkin wasn't by any means the worst dancer, and even had a certain awkward grace in the way she moved.

(原文ペーパーバック版 p57)

『さゆり』の訳には特筆すべき特徴が二点あります。一つは、まえから順に訳しながら日本的論理展開で訳されていること。もう一つは日本の情緒を含む言葉で英語臭を完全に消していること。

この話の舞台は京都の祇園です。訳書を手にした場合、おおかた日本人が日本語で日本を舞台にした小説を読むのですから、ほんの少しの英語臭さでも鼻につきます。しかし小川氏の訳は日本人の論理と言葉を軸にして、そこからぶれることなく訳しているために嫌悪感を抱かせる要素が微塵もありません。

上の訳文からは <It...that ~> や <as...as> の構文・論理展開がまったく透けていません。そのかわりに「体たらく」「見ているほうも」など、言葉尻で探しても原文には見当たらない単語がなっています。また日本語にはない完了形、<the first one had been> の部分は時制ではなく比較のようなかたちで英文の言わんとしている内容を簡潔に伝えています。

なにより驚くのは「下の下」という言葉です。原文はと言えば <the worst dancer> となっています。最上級は「最も～」と訳すものだと中学生のころに教わりますし、最上級が出てくれば英文和訳の際にはどこかの宗教かとおもうほどみな意を一つにして「最も…」と書きはじめますが、はたして普段ものを書いたり話したりするときに「最も…」というフレーズがどれほど口を付いて出てくる機会があるでしょうか。英語ではとにかく比較級だの最上級だのがよく出てきますが、必ずしも「～より上」、「一番～」と言いたいのではなく、単に強調しているにすぎないことが往々にしてあります。いちいち比較級、最上級に訳していたら読者は読む気が失せます。それほど比較級、最上級は英文で頻出し、日本語の文脈に馴染まないものです。それをさらりと訳す小川氏の「下の下」という言葉の発想はただただ感服するばかりです。

次の例を見てみましょう。

まことに粋をきわめたというべき美しさでしたが、それもそのはず、私が知らなっただけのことで、日本でも指折りの格式あるお茶屋さんに来ていたのでした。いいえ、お茶を飲みに行く店ではございません。男の方が芸者をあげてお遊びになるところがお茶屋なのです。

(上巻 p115)

It was exquisitely lovely as indeed it should have been; because although I didn't know it, I was seeing for the first time one of the most exclusive teahouses in all of Japan. And a teahouse isn't for tea, you see; it's the place where men go to be entertained by geisha.

(原文ペーパーバック版 p81)

上の英文は私たち日本人に馴染みにくい、つまり直訳をしたのでは作者の言わんとすることがまったく伝わらない文章です。

まず一つは <as indeed it should have been>。直訳すると「事実、お茶屋は美しかったはずであるように」となりますが、一体なにを言おうとしているのか読むほうには伝わりません。ひっかかるのは <当然を表す should> です。ここに <強調の indeed> が加わると下手な訳者は決まって「事実、……べきである」と、わかったようなわからないような、字面だけなんと偉そうな訳文をつくるものです。原文でこれだけ短いのですから、やはり日本語でもさらりと流したいところなのですが、助動詞・完了形・強調などの要素を頭でこねくりまわしているうちにいびつで冗漫な訳文以外浮かばなくなります。

ところが小川氏はこの部分を「それもそのはず」の一言で英語の持つ要素を簡潔に表現しています。こういった訳出の仕方は、まず学校では教わりませんし、辞書や翻訳指南書にも載っていないでしょう。多読・精読の訓練を積んだ者のもとにミュージアムが降りてきた、そんな神秘的な力さえ感じられます。こういう文章の訳で訳者の力量というものが浮き彫りになる気がします。

次は <one of the most exclusive teahouses> という箇所です。私事になりますが、中学校でこの <one of the 最上級> という構文を「一番　なもののうちの一つ」と訳すものと習ったとき、どうしても腑に落ちないことがありました。「一番　なものって、一つじゃないの。そのうちの一つということは、一番なものというのはそんなにたくさんあるものなの。だとしたら最上級ってなに？」中学生だったわたくしの頭はパニック寸前でした。おそらく先生に質問にいったとはおもいますが、「ああ、なるほど」と感じた記憶が残っていないので適当にあしらわれてしまったのでしょう。わたくしの方でも「どういうことかよくはわからないけれど、要は『一番　なもののうちの一つ』と書いておけばテストで丸をもらえるらしい」と最小限の労力で、この <one of the 最上級>

問題を一件落着かせてしまいました。

それから十年後、「この <one of the 最上級> は物理的な関係を表しているのではない。 <very> の強調である」と、とある識者に教わりました。そのときは十年來封印されていた呪縛が解かれた心持ちでした。なるほど、解釈の仕方は分かりました。しかし翻訳者として訳すのであればこれをどういった言葉で表現すればよいのでしょうか。以来、 <one of the 最上級> をひとはどう訳すのかとひそかに気にしていましたが、納得できるものには出会えませんでした。ところが『さゆり』でため息のするような表現に出会ったのです。

<one of the most exclusive teahouses in all of Japan> の部分を直訳すれば、「日本中で一番高級なお茶屋のうちの一つ」となります。 <one of the 最上級> を <very> の強調として訳しても、せいぜい「日本で非常に高級なお茶屋のうちの一つ」といったところでしょう。ところが小川氏の訳文では <one of the 最上級> の部分を、作者が日本人であったらまさにこう書いたであろうという言葉で表現しています。「日本でも指折りの（格式あるお茶屋さん）」は、原文の意味をきちんと伝えた日本語的表現であり、ほのかな日本の情緒さえ漂わせています。わずかな英語臭も感じられないことに驚かずにはられません。

この言い回しは <one of the 最上級> がでてきたらいつでも使えるというのではなく、この文脈だからこそ輝きを発した表現でしょう。応用性のごく低いものです。ただし <one of the 最上級> をこれほどうまく訳している訳本にいまだわたくしは出会ったことがありません。「いや、それはほめすぎだ」と言う方がいらっしやいましたら、ためしにこちらの原書をページ訳してみてください。小川氏のようにすると繊細な日本語で訳出できる方は、そうはおられないでしょう。

そして訳の技術とは関係のないところかもしれませんが、小川氏の訳書『さゆり』はどの頁を開いても日本語の活字本として、その見た目が美しいこと。原書ではなく訳書で読む価値のある本がここにあります。

翻訳者はえらい!

どうして、みんなこんなに英語ができないのだ。ならばと、葉袋が後書きで「好著」と推薦する『英文をいかに読むか』(朱牟田夏雄・文建書房)を紐解いてみる。朱牟田は戦後を代表する英文学者。行方昭夫の『英語のセンスを磨く』(岩波書店刊。これは結構よい読解指南書だ)にあるように「(行方が)朱牟田夏雄、上田勤両教授から直接学んだ東大教養科の英文精読の方法の伝統」が窺えるのかと思っただがさにあらず、たちどころにほころびが目についてしまう。総じて訳文は悪い、文法的解説に瑕疵散見。

朱牟田夏雄著『英文をいかに読むか』で目に入ったあやしい箇所: 抄

* 上段は朱牟田のことば。 以下は私のコメント

P62: As I grow older などと老成じみたことをいっているのが面白い

grow older は「年を重ねる」こと。1歳から2歳になるのにも使う。

P71: untrue to life 「人生に真でない、忠実でない」

「人生をありのままに写していない」true to life: ありのまま(この true は、現実・事実合致しているの意)* (ここの文脈で問題にしている演劇は)実際と違っていても、そのなかに真があるからこそ観衆は感動するのです

P72: [訳] ...それはその作者たちが、事によるとやむを得ずにかと思うが、... (原文は perhaps of necessity)

of necessity は「必然的に」。perhaps は「ひょっとすると」が原義だが、あとに強い表現のことばが来た場合、その表現を緩和し「おそらく」の意味になる。「当然のことではあろうが」

P246: suggest alarm 「警報をほのめかす」とは「危険を感じさせる」(= make one think of a danger) の意。

可算名詞と不可算名詞の区別ができていない。alarm は可算名詞で「警報」、不可算名詞で「驚愕」「恐慌」。suggest は「ほのめかす」でなく「連想させる」「引き起こす」「心にきたす」

P53: [訳] 「わたしの歴史観は、それ自身が一つの小さな歴史だといえる。その歴史も、主として他の人

が作ってくれた歴史で、私自身の作った歴史ではない」

原文 My view of history is itself a tiny piece of history; and this mainly other people's history and not my own; ...

下手な哲学の翻訳みたいで、筆者のいわんとすることが掴めない。二つ目、三つ目の history は「歴史学」をさすのを明示すべきだろう。

直訳

「私の歴史観それ自体が、歴史学のささやかな一個である。そしてこの歴史学というものは主として他の(歴史家の)人々の(つくってきた)歴史学であって私自身の歴史学ではない」

意識

「私の歴史の見かたそのものが一個の歴史学であるとはいえよう。だが学問としての歴史総体は多くの人たちが築いてきたもので、わたしひとりのものではない」

この種の英文読解本は、ペラっと紙面をなめまわすだけで分った気になれるせいがいぶん売れているようだが、相当な実力をもつ者が書かないと却って読者を惑わすことになりかねない。読者にもいるだろう編

変化に惑わされない「真理」

翻訳とは何か - 職業としての翻訳
山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甦る名著 - 絶妙に英訳された15万用例

NEW 斎藤和英大辞典普及版
斎藤秀三郎著 A5判・1,800頁 本体6,800円
ご要望にお応えし、お求めやすい「普及版」を発売

TranRadar 電子辞書 SHOP

<http://www.nichigai.co.jp/translator/>

定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日外アソシエーツ

<http://www.nichigai.co.jp/>

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8
03-3763-5241

集者への戒めとして（お手軽本を無責任に出して社の信用、自分のプライドを傷つけ、ひいては日本文化の劣化をきたさないように）、むかし読んだ名文家のエッセイを掲げる（訳は自分でつけてみてください）。

Strange as it sounds, there are firms which will accept a book they expect to lose on, and reject another which promises a comfortable profit. They will publish “loser” sometimes, because it reveals original talent in the author, and they believe that in time that talent will be appreciated by the public. Then, they will not only get their money back, but they will have added to their reputation for discovering good work. Similarly they may reject a certain “winner” because, though they know it will please the uncritical public, it is a bad book, and they would be ashamed to let their name appear upon it.

昔の歴とした英語学者も最近の偉い英文学者も、有名予備校の元・現英語講師も、英文和訳ひとつできないのは、きわめて問題だ。高等教育の段階で不鮮明な日本語訳を教わった学生は、翻訳とはそういうものかと理解し、社会に出て、また学究となって意味不明な日本語を撒き散らすこととなる。大きくは日本語の破壊であり、個別にみれば契約書の誤読による利益喪失であり、機械の操作ミスによる事故であり、文学・芸術の誤訳による無感動であったりするだろう。そもそも彼ら英語教育者は「英語を教えること」で飯を食べているのだ。文法的に正しいことは当然として、逐一の語義にこだわり、論理的整合性をもち、日本語としておかしくない訳文を教わる側に示す義務があろう。そのためにこそ、教材とする英文を吟味する十分な時間と適切な報酬を職業人として保証されているのだ。

そこへいくと翻訳者は辛い。これまで見てきたような訳文を出したら、二度と使ってもらえないだろう。翻訳者にはいま挙げた英語教育者の義務に加え、読み心地のよい日本語を、僅かな報酬（本誌 2003 年 7 月号所載、山岡洋一の翻訳料過去・現在比較レポートを見よ）と限られた時間で提供せねばならぬ宿命がある。

『武器よさらば』の出だし部分

翻訳一本で生活費を稼ぎ出さねばならないプロ翻訳家と、半年間週 6 コマ（国立なら 3 コマ）の授業で年間の生活費が保証される（しかも授業で実用に供し、いわば減価償却した翻訳が出版されれば、副収入になる）大学教員との、ハンディは大いにあるはずだ。常識で考えれば、そうした場合、プロ翻訳家より大学語学教員のほうが当然質がよくていいはずであるが...

『武器よさらば』の出だし部分を、この両者で比べて

みよう。

A 訳

その年の夏の終りを、ぼくらはある村の家ですごしたが、そこは川と平野を中にはさんで山なみと向き合うところにあった。川床には小石や丸石があって、日にかわいて白く、水はいくすじかに分れ、澄んで、流れが速くあい色に見えた。部隊が家のかたわらを通り街道を遠ざかって行く、すると彼らのかき立てたほこりが木々の葉に一面にふりかかった。木の幹もいたるところでほこりにまみれ、その年は落葉が早くきた、だからぼくらは、街道を行進する部隊とまいあがるほこりと微風にそよいでは落ちる木の葉と兵隊の行軍と、それから落ち葉があるきりでがらんとした白い街道とを見てくらしした。

B 訳

その夏の末、ぼくらは、ある村の一軒の家ですごした。その村は河と平野をへだてて山々と向いあっていた。かわいた河原には、小石や丸石があり、日に照らされて白く光っていた。水は、幾筋にもわかれ、澄んで、流れも速く、青かった。部隊がつぎつぎと家の側を通りすぎ、道路をくだっていった。彼らの巻きあげるほこりが、木々の葉に白い粉をふりかけた。幹もほこりにまみれていた。その年は葉の落ちるのが早かった。ぼくらは部隊が街道を行進するのを見ていた。ほこりが舞いあがり、木の葉が風にゆさぶられて落ち、兵隊たちは行軍をつづけた。そのあと、道路は木の葉だけで、ただ白っぽく見えた。

印象批評でなく、論理的に比べてゆこう。

語法

A,B とも誤りはない。

語釈

A「川床」は日本語の誤用。B に誤りはない。

構文

A は原文の区切りに忠実。B は適宜、文を原文より短く切っている（句点は A が 4、B が 11。読点は A が 11、B が 14）。

日本語と英語は構造が違う以上、義理堅く文の区切りをあわせる必要はない（シェクスピアがエリザベス朝人だから、それに近い時代の近松の文体で訳そう、というのが無意味であるのと同じ）*。私が前々回細かくやった構文分析のカンマと and の意味内容と大きくずれなければ、どちらも可（ヘミングウェイが日本人だったらどう書くかが大事）。

* 「日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武蔵野は暮れんとする、寒さが身に沁む、其時は路をいそぎ玉え、顧みて思わず新月が枯木の梢の横に寒い光を放っているのを見る」(国木田独歩『武蔵野』)
まさか A の訳者がこの文体を意識したわけであるまい(万一そうだとしても、効果を上げてはいない)。

リズム

音読してみよう(あまりいわれることがないが、我々は文章を読む時じつは頭の中で「音読」しているのである。つかえずに読める訳文のほうがよい)。B のほうにリズムがあるのは明らか。

視覚

多言を要すまい。一文の最後まで読まねばイメージが浮かない A に比べ、B は逐一生き生きした場面が脳裏に浮かぶだろう。

長さ

一般に、同じ内容を伝えるなら、短い方が凝縮してよい。これは A より B のほうが 5 字多いが、句読点の多用に

よるもので、文字自体がただらしているわけではない。

判定は、以上よりして B。A は大学教師である谷口陸男によるもの(岩波文庫)。A はプロ翻訳家、大久保康雄によるもの(新潮文庫)。劣悪な環境にもめげず、翻訳家って本当にえらいものですね。

いや翻訳志望者としてじつによくやっている。誤訳をするな、表現をうまくしろ、きちんと調べろ...過酷な訓練に耐え、いつ来るか分からない出版デビューの機会を待っているのだから(それもたいした収入にならないのを承知で)。

全国の翻訳家志望者諸君、恐らく皆さんの英語力は予備校教員や大学英語教員の平均レベルより上です。さらにきっちり読み解いた上で、自分の文体をつくれれば翻訳はできる。チャンスを待って、あきらめることなく、ひたむきに歩んでください。

* * 柴田耕太郎主宰 『英文教室』全日講講座 「翻訳ジム」 * *
- 受講生募集のお知らせ -

前回までに告知の『英文教室』単科講座の秋季募集は締め切りました。
今回は、来春開講、1年間徹底して英文を読み解く全日講「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現場を踏んだ人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。
人生のなかの 1 年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』
事務担当 前川
TEL : 03-3357-1189
FAX : 03-3357-4489
Email : educa@id-corp.co.jp
〒162-0054 新宿区河田町 7-6

パソコンの世界の常識は世間の非常識

15,750 円の請求書

ファックスとコピーの複合機を使っている。プリンターとスキャナーの機能もついているし、レーザーなので速いし、値段は 10 万円少しと安かった。それに A4 用なのでサイズも小さい。個人で仕事をする翻訳者には打って付けだと思っていた。

ところが先日、とんでもないことが起こった。発端は何ということもない紙詰まりだ。定着器のところに詰まっていて、見えているのに取れない。仕方なくサービスに電話して、取り方を教えてもらおうとした。そこからが仰天だった。まず、古紙を使っているでしょうと非難するような口調でいう。古紙を使うとローラーに巻きついて、ローラーを交換しなければならないという（因みに、この機械は「古紙対応」をうたい文句にしている）。いや、新しい紙しか使っていないと答えると、それでも簡単には取れないので、修理になりますというのだ。送ってもらえば、1 週間でも送り返しますという。冗談ではない。1 週間も待てるはずがない。結局、出張費を負担することにし、翌日に来てもらった。

紙詰まりは別に珍しくもない。大量印刷用のレーザー・プリンターが別にあるが、この機械では毎日のように起こる。とくに起こりやすいのが定着器のところのようだ。熱を加えるので、紙が曲がるのだろう。問題の複合機でもまたいつ紙詰まりが起こるか分からないので、そのときの対処の方法を学ぶつもりだった。だが、作業を見ていて、これは無理だと思った。徹底して解体しなければ、定着器の中の紙詰まりが取れない仕組みになっているのだ。

これまでコピー機やプリンターなど、レーザー系の機械はいくも使ってきたが、紙詰まりでこれほどの大事になった経験はない。紙が詰まっても、簡単に取れるようになっている。だが、この機械は違った。紙を取り除くだけで、サービスに依頼するしかない。後日届いた請求書は、15,750 円だった。10 万円少しの機械で、紙詰まり 1 回に 15,750 円だ。

念のために問い合わせたところ、この会社では紙詰まりは故障として扱っているのだそうだ。そういう注意書きは読まなかったがと質問すると、パンフレットなどにはそうは書いていないという。いま 9800J とい

う後継機種が実売価格 8 万円以下で売られている。念のために質問すると、この機種も定着器での紙詰まりは「故障です」という。複合機を買おうとしている人は注意すべきだ。8 万円以下で買っても、紙詰まり 1 回に 15,750 円を取られる。

こんな商法は、パソコン以外の分野であれば、通用するはずがないと思う。紙詰まりのようなごく普通に起こる現象に対応できない設計に問題がある。紙詰まりが起こったら 1 回に 15,750 円頂きますというのでは、パソコン関連以外の分野なら、悪徳商法として糾弾されるはずである。

OS のアップデートという恐怖

パソコンの世界の常識は世間の非常識だ。世間の常識で考えてパソコンに頼っていると、とんでもない被害を受けることが少なくない。その典型例が OS のアップデートだろう。

最近のウィルス騒ぎで、OS のアップデートを怠っているユーザーがいると非難する声があがった。意識が低いユーザーがいるので、皆が迷惑するということのようにだ。だが、OS のアップデートをしたためにパソコンが起動しなくなり、OS を再インストールするしかなくなって、大切なデータがすべて消えてしまったという話はいくらでもある。だから OS のアップデートは恐ろしい。アップデートをすることによるリスクと、しないことによるリスクを秤にかけるのは当然ではないだろうか。

自動車や携帯なら、こんなやり方は通用しない。アップデートが必要なのは製品に欠陥が見つかったからで、無料の修理か交換に応じるのが常識だ。自社製品の欠陥を修理する責任をユーザーに押しつけていて、問題が起きたときにユーザーの意識が低くて困るといふ。こんな居直りが世間で通用するはずがない。

翻訳者は仕事の性格上、パソコンに頼る部分が多い。何らかの自衛策が必要だと思う。因みに、この文章を書く際には、パソコンは使っていない。大昔のワープロ専用機を使って書いている。だが、レイアウトや発信にはやはりパソコンを使うしかない。怖いのが、別の方法が見つからない。